A.O.G -Agent　Of　God- ～旋律を奏でし鬼～

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａ．Ｏ．Ｇ －Ａｇｅｎｔ　Ｏｆ　Ｇｏｄ－　～旋律を奏でし鬼～

【Ｎコード】
Ｎ７１９２Ｚ

【作者名】
反省猫

【あらすじ】
今度の主人公はいきなり死亡！？　そんなある意味ついてない主人公が今回は音楽をテーマに軽音部の仲間達やいろいろな作品とクロスオーバーする物語。いざ、開演です！
※この作品はけいおん！の二次創作小説です。
オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方にはおすすめできません。
それでもいいよという方は、暇つぶしにどうぞ～

第０楽章　『邂逅そしていきなり死亡！？』　※１／５改訂版（前書き）

という事で今回は、けいおん！など色々な作品とクロスします。
そしてまた新たな主人公が物語の渦中へと身を投げます。
それでは新たな話の幕開けです！　どうぞ～

第０楽章　『邂逅そしていきなり死亡！？』　※１／５改訂版

？？

『問おう、貴方が私のマスターか？』

桃李

「…なっ　…な」

俺は、某聖杯戦争でお馴染みのある場面に直面しているのだが……

？？

『ぅん？　聞こえなかったか？　貴方が私のマスターか？』

桃李

「なんで……なんで……」

本来ならそこに【騎士王】が登場する場面で……

桃李

「なんで、喋るギターなんだよぉぉぉぉ！！！」

俺の目の前で問いかけている存在……【騎士王】という英霊とかではなく……喋るエレキギターだった。

遡ること、数分前――――

何はともあれとりあえず、俺の自己紹介をしようか。

俺の名前は、山彦（やまびこ）　桃李（とうり）。

市立二見学園に通う普通の男子高生だ。
俺の家は代々、多聞神社の神主をしている。
なので、将来はここの神主になるんだろうと思っている。
だが、たまに俺の将来これでいいのかと思ってたりもする。
まぁ他に夢もないし先の事はわからないが……。
横道に逸れたな。
俺が学校から帰ると親父が俺に倉庫の整理を頼まれたので、それをしぶしぶ了承し、
倉庫の中を片付けていると、いきなり見知らぬいや聞き知らぬといったほうがいいか
そう声が倉庫中に響いた。
???
「誰か――私の声が――聞こえる者は――――いないのか？」
桃李
「ん??　誰だ今の声？」
桃李が倉庫の中を探すがそれらしい人物は見当たらないというか
今ここにいるのは自分だけのはずだが…と首を傾けて考えていると

また声がする。

???

「私の声が聞こえるのか？　私はここだ…」

よくよく聞いてみるとあるアニメのキャラの声に似ている。

桃李

「（えーと…なんだったかな…あ、そうだ！　Ｆａｔｅのセイバーの声に似てるんだ！）」

そう思い出した瞬間、ある光景を思い出す。倉庫、川○ヴォイス、倉庫の床には魔法陣らしきもの、

桃李

「（これはもしかして、もしかするとセイバー出現フラグキタ━（゜∀゜）━！って状況じゃないか？）」

俺はその事に心踊りながら声のする方へ向かうとそこには

かなり古い青いエレキギターが置いてあった。

桃李

「アルェー、セイバーは？」

桃李がセイバーの姿を探すが見当たらない。

桃李

「…やはり、そうだよな。現実に起こらないよな～。となるとあん

な幻聴が聴こえるなんて
俺疲れてるのかな～」

桃李がガッカリしていると、またあの声がする。

??

「ん？　何を落胆しておるのだ？　私ならここにいるぞ？」

桃李

「…ここにって、どこにも居ないじゃないか！」

桃李がそう叫ぶと先ほどの声が呆れた感じで、

??

「バカ者、お前の目の前にいるだろ！」

桃李

「目の前って…　え？　え？　えぇぇぇぇぇぇ！！」

桃李は驚いた。先ほどの古いギターからあの声が聴こえてくるのだ。

??

「やっと気付いたか、バカ者。まぁいい、それでは問おう、お前が私の奏者（マスター）か？」

そして回想が終わり最初の所に戻る。

??

「まぁ、この姿は先代の趣味だな。気にするな。私の名前はヴァイシュラヴァナという。

こっちでは毘沙門や多聞と言えばわかりやすいか。……それでお前の名前は？」

桃李
「山彦　桃李だ。多聞って……。もしかして家の神社に祀ってあるあの？」

多聞
「あぁ、その通りだ。といっても私は分身のほうだがな」

桃李
「分身って…。ちょっと待てよ。今すごい状況なんじゃ…」

多聞
「やっとわかったのか、一応神だ。崇めてもいいぞ」

桃李
「まぁ、それは置いとくとしてそれよりさっき言ってた奏者ってなんだ？」

多聞
「奏者というのは、悪しきモノや不浄なるモノを清めの音で浄化する者の総称だ」

桃李
「なるほど～、それはわかったが俺が奏者って間違いじゃないのか？」

多聞
「間違いじゃないぞ。お前からは奏者の力が出ている。まぁしかし、

まだちゃんと覚醒してないのだろうな。物凄くわずかな量の力だ。
まぁそれは今後おいおい覚醒するだろうさ」

桃李
「ふーん、俺の中にね～。と言われてもまったく実感ないんだけどな」

多聞
「とりあえず、私を弾いてみろ。そうすれば分かるさ」

桃李
「お前を？　とりあえず弾いてみるか…」

桃李は半信半疑だったが、多聞の言葉を信じ、多聞を弾いてみる事にした。

すると

ギギギギ…ブチン！！

ギターの絃が切れてしまった。

多聞
「な、なんだと！？」

多聞は絃が切れた事がよほどショックだったようで大声で叫んだ。

桃李はヤレヤレといった感じで

桃李

「…まぁ古かったからな。仕方ない新しい絃に張り替えてやるよ」

桃李がそう多聞に言うと

多聞

「すまない。かなりの年月ここに置かれてたんで自分が古くなったのを忘れてた…」

桃李は多聞を抱え倉庫から出ようとした瞬間、

ブサッ！！

桃李

「…え？」

多聞

「なっ…」

桃李はゆっくりと自分の心臓辺りを見ると蛸の足のような軟体動物の…俗に触手が、

桃李の心臓部と多聞を貫通していた。

桃李はギギギっと音がするような感じで後ろを振り返ると、

白いハットに丸型レンズのサングラスをかけた痩せ細った感じの男がいつの間にか桃李の後ろに立っている。

よく見ると男の右腕は人間だったが、左腕は先程みた触手になっており、

これをやった犯人というがすぐにわかった。

男は口元に笑みを浮かべ、

男

「悪いな～、奏者は一人残らず消せと俺の上司が言ったんでな」

桃李

「お、お前は一体……」

男

「これから死んでいくやつに名乗り理由はねぇーよ。じゃーな、奏者と想具」

ズシャズシャズシャズシャズシャ――――――！！！　ブシャァァァァァァ！！！

そういうと桃李を触手で滅多刺しにし、桃李の全身から血が一斉に吹き出し、

多聞

「桃李！　き、貴様ぁ！　…まさか奴らの！」

バキッ！！

多聞も真っ二つにされ、地面に落ちていった。

ドサッ！！

桃李はそのまま意識を失いその場に力なく倒れた。倉庫の床は血で真っ赤になっていた。

男は桃李と多聞に背を向け、

男

「さて、次はあのセカイへ行くとするか～。クックック」

男を低い笑い声を残しその場から一瞬のうちに消えた。

それから1分後、不思議な事が起きた。二人が倒れた場所に無数の光が現れ、

力尽きた桃李と真っ二つにされた多聞を無数の光が包み込みんでその場から消えたのだ。

一体、二人はどこに連れて行かれたのだろうか…それは次回、話すとしよう。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

第０楽章　『邂逅そしていきなり死亡！？』　※１／５改訂版（後書き）

作者・桃李「ということで、作者と桃李のあとトーーーーーク！！」

作者「という事で、始まりました～『Ａ．Ｏ．Ｇ　－Ａｇｅｎｔ　Ｏｆ　Ｇｏｄ－　～代行者は旋律を奏でし者～』ですが」

桃李「ちょっと待て、なんでいきなり俺死んでんの！？」

作者「それはね、君にある能力を付加する為だよ」

桃李「なるほど……って納得できるか！！！」

作者「まぁまぁ、落ち着いて～」

桃李「落ち着けるかっつーの！　死んでるんだよ俺は！！」

作者「まぁ、怒っている主人公を横に置いといて～」

桃李「置いとくなよ！！」

作者「主人公の簡単プロフィール～のコ～ナ～、という事で、まずは主人公の『山彦　桃李』の簡単なプロフィールを」

～～プロフィール？～～

名　前：山彦（やまびこ）　桃李（とうり）

年　齢：１７歳

趣　味：漫画　ゲーム　ギター

好きな物：カレー

嫌いな物：外道　グリーンピース

見た目：黒髪で肩まで伸びている髪を後ろでゴムを使い束ねている。
　　目は切れ長。顔はイケメンの部類に入る（上の中）

ＣＶイメージ：宮野　真守　（ＤＯＧ　ＤＡＹＳのシンク・イズミ役）

あるセカイの高校に通う１７歳の青年。性格は、面倒見が良く、いろんな人に好かれる。恋愛方面は普通。鈍くもないし鋭くもない。中学のときからギターをやっており、結構な腕前。

両親は、海外に出張中。

作者「プロフィール完全版は今度書きます。多聞のプロフィールもその時に。
　　ということで、次回予告よろしく～」

桃李「謎の男により殺された俺と真っ二つにされた多聞はとある人物により復活するが、その人物から
　　驚きべき提案をされることになる次回、第１楽章　『代行者は奏でし者』」

作者「という事で、次回またお会いしましょう～」

作者・桃李
「ではまたな～」

作者
「ご意見・ご感想お待ちしております～」

第1話　『代行者は奏でし者』（前書き）

いきなり死んだ主人公桃李と多聞の二人。謎の光によりどこかに飛ばされたが……そこは一体。
というかバレバレの展開ですね（@_@;）
それでは第1楽章をご覧ください。どうぞ～

第1話　『代行者は奏でし者』

??

「桃李…　桃李…」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

俺は目を開ける事にした。

桃李

「ぅん……??　ここは……一体?　君は誰?」

桃李が目を覚ますと見知らぬ白い空間と見知らぬ黒髪の女性がいた。

??

「あぁ、この姿では初めてだったな、私は――多聞だ」

多聞と名乗った女性の容姿は、まんまＦａｔｅのセイバー【英霊アーサー＝ペンドラゴン】の髪の色を黒くし、

肌の色も小麦色になったような感じだ。はっきりいって美人である。

桃李

「多聞だって!?」

桃李が自分の容姿を驚いた事が気に入らなかったのか。

多聞

「むっ…　そんなに驚くことはないだろう!」

多聞は頬を膨らませ怒っているがその仕草が、

桃李
「（か、可愛い／／／）」

そう思った瞬間、桃李の顔が赤くなる。

それを見た多聞は訝しげに桃李を見ると

多聞
「どうしたんだ？　いきなり顔を赤くして？」

桃李
「いやー、多聞の仕草があまりにも可愛いかっ……あ」

桃李がしまったという顔をすると

多聞が頬をうっすら赤く染め顔を背け、

多聞
「か、可愛いなどと／／／」

桃李
「（いや、真剣可愛いんですけど、お持ち帰りしていい？　あ、やっぱだめ）」

などを考えていると横から

？？

「あのー、そろそろ話いいですか～？」

そう言って、二人の間に金髪の女性が話に割って入った。

桃李
「うわぁ！！」

多聞
「お、脅かさないでください、ルカ様！？」

二人が慌てたのを見て金髪の女性は微笑むと

？？
「うふふ。はじめまして山彦　桃李さん。私は第1級多世界管理者ルカ＝ツヴァイト＝ルミナスと申します」

桃李
「えーと…」

ルカ
「ふふ、そうですね～貴方のところで言うと“神”ですかね～そんな存在です」

それを聞いて桃李が驚く。

桃李
「か、神！？」

ルカ
「ふふふ、はい～」

多聞
「ちなみに私の上司よりかなり上のお方だ。失礼の無いようにな」
桃李
「で、その神様が俺に何のようですか？」
ルカ
「はい、それなんですが～その前に一つ言わなければならないことが……」
桃李
「はい、なんでしょう？」
ルカ
「貴方は一度死んでいます」
一瞬、その場の空気が凍った。
桃李
「死……え？」
ルカ
「はい、貴方は一度死にました」
桃李
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！　ちょ、ちょっと真剣で！？」
多聞
「真剣だ。ルカ様の力で死んでいたお前を生き返らせてもらったの

だ」

桃李
「それでかっ！　おかしいと思ったわ～、死んだのならなぜ今ここにいるんだと」

ルカ
「それでここからが本題なのですが、――桃李さん、神の代行者になりませんか？」

桃李
「はい？」

それから俺はルカさんとやらに神の代行者がなんなのかを説明してもらった。

※神の代行者については、A．O．Gシリーズの真剣で代行者に恋しなさい！参照で

桃李
「なるほどな～、そう言えば俺を殺した奴は一体何者なんだ？」

ルカ
「それは、私たちの敵のネガ・マリスに生み出されし“怠惰”の使徒アケディア＝S＝ベルフェゴール

の部下の一人フォルネウスそれがやつの正体です」

桃李
「フォルネウス…。やつは今どこに？」

桃李が真剣な表情でルカに聞くと

ルカ
「はい、やつは今そのセカイの奏者を狙いにそのセカイに向かっています」

桃李
「そのセカイとは？」

ルカ
「【けいおん！】というアニメの設定によく似たセカイと言えばいいでしょうか」

桃李
「【けいおん！】？　どんなのかは知らないけどとりあえず代行者の件受けるよ。
で、俺はそのセカイに行けばいいのか？」

ルカ
「はい、そうです。では行くに当たって希望する能力を言ってください」

桃李はルカからそう言われ、考えると

桃李

「う～ん、そうだな――――」

桃李が希望した能力は以下のとおり

?:自分の中にある奏者の力の覚醒

?:音関連の技や術。

?:仮面ライダー響鬼のような鬼化（それにより音撃が可能に）

?:身体能力成長限界無し（どこまでも鍛え上げることができる。しかし、体の感じは細マッチョ的な感じで）

?:音楽の才能

桃李

「これだけでいいっす」

ルカ

「なるほど、その能力＋あんたにはある能力が追加されます」

桃李

「ある能力？」

ルカ

「能力名は――――直死の魔眼」

それを聞いて桃李はびっくりする。

【直死の魔眼】

ありとあらゆるものには発生した瞬間から予め決まっている崩壊の時期つまり死期が内包されている。
そしてこの眼を持ったものはその“死”という情報を【線】という形で視ることができる。
その為、外的要因や魔術的要因も全て無視してありとあらゆる対象を殺す事ができるということだ。

桃李
「なっ……なんでそんな力が！」

ルカ
「一度死んで復活した時に貴方は無意識的に死を理解してしまったのでしょう」

桃李
「俺はこんな力いらないぞ！」

ルカ
「……ごめんなさい、その力は外すことは出来ないの。その代わり、自分の判断でＯＮ／ＯＦＦ出来るようにしておきますね」

ルカが申し訳なさそうにそう言うと桃李がしぶしぶ了承する。

桃李
「……わかった。そうしてくれると助かる」

ルカ
「では、能力を付加しますね（一応、七夜の体術も使えるようにしておこうかしら。

何かがあった時のために。それと魅力を最高値まで上げておきましょう。
多少の償いとして……）」
そう言うとルカは目を閉じ、呪文を言い始めるとその瞬間、桃李の体が一瞬輝き、やがて収まった。

ルカ
「はい、これで能力が付加されました。あとは希望の武器とかある？」

桃李
「ん～～、じゃ、多聞を直してくれ。絃もずっと張り替えなくてもOKな状態の全身新品で
見た目はそうだな～Ｂｅａｓｔ　ＷＭＤ　ＳＯＢに変更してくれ。念じれば大剣になるようにしてください。
あ、多聞はそれでいいよな？」

多聞
「問題ない。お前が私のマスターだ。好きにしてくれていい。できたら私がそれに
力を入れるだけだ」

ルカ
「分かりました。では、始めます」
そう言うと再度目を閉じ、まっぷたつになったギターの上に手を置き、また違う呪文を唱え始めた。

するとギターが光り出し、新たな姿へと変貌した。
※ギターのイメージは、“Ｂｅａｓｔ　ＷＭＤ　ＳＯＢ”で検索すれば出てくると思うのでそれ参照で。
ギターの色は前と同じく青に黒い線の模様が入っている。

桃李
「おお、やっぱいいな～、ほしかったんだよな～これ」

桃李がギターに顔をつけてすりすりしていると

多聞
「喜んでいる所悪いが、私がそれに乗り移るので少し離れてくれないか？」

桃李
「え？　力を入れるってそういうことなのか？」

多聞
「あぁ、そのほうが対応できることもあるしな。では行くぞ」

そう言うと多聞は真言を唱え始め、次の瞬間ギターに吸い込まれた。

桃李
「なっ……」

多聞（ギター）
「ふう、これで準備は完了した。とりあえず、桃李。力の確認とすぐ技使えるように

練習するぞ」

桃李
「わかった。じゃ、試させてもらうけどここ使っていいのルカさん？」

桃李の質問にルカは笑顔で

ルカ
「はい、大丈夫です。どんどん試してみてください」

こうして桃李と多聞は力と技の使い方を試すのだった。

5時間後――――

桃李
「ふぅ。一通り試したな。後はあっちで調整するか」

多聞
「あぁ、それにしても驚いたぞ。まさか5時間でここまで使いこなせるとは…。
普通なら1日はかかるぞ？」

桃李
「俺って天才って事？」

多聞
「バカ者、調子に乗るな！　お前なんかまだまだひよっこだ。
真の奏者になるまで私がみっちり鍛えてやる」

それを聞いて桃李はうへぇと嫌な顔をする。

桃李
「真剣かよ～。でも、真面目にやっとかないとまた死ぬの嫌だしな～」

ルカ
「あぁ、そうでした。一つ言うの忘れてました。
桃李さんはもう死にませんよ～。さっき不死属性も追加しときましたから」

それを聞いて桃李は喜ぶ。

桃李
「おお！　それは嬉しい。ならどんな攻撃を受けても死なないんだな？」

ルカ
「死にはしませんが、攻撃されたら傷は負うので死にそうになる攻撃喰らうと
かなりの激痛ですよ～」

桃李
「えぇぇぇ…真剣かよ～。まぁ死なないだけマシか～」

多聞

「今度は避けるや防御の修練もしないとな」

桃李
「ああ、……さてとそれじゃ行きますかその【けいおん！】に似たセカイに」

多聞
「うむ！」

ルカ
「では、ゲート開きますね～」

そう言うとルカが地面に手をかざすと桃李たちの目の前に大きな魔方陣が現れる。

桃李
「じゃ、行ってくるね、ルカさん」

桃李は多聞の入ったケースを担ぎ、左手をスチャっと挙げ、ゲートの中に入った。

ルカ
「いってらっしゃーい」

ルカは微笑みながら片手を振り、桃李を見送ったのだった。

ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

ｔｏ　ｂｅ

第1話　『代行者は奏でし者』（後書き）

作者・桃李「ということで、作者と桃李のあとトーーーーーク！！」

作者「という事で桃李も代行者となり、多聞も新たな姿で復活しました」

桃李「次回からけいおん！のキャラとか出てくるのか？」

作者「あーでてきますよ。唯と憂とか」

桃李「ほー。俺と多聞どう平沢姉妹と関わるのかは次回乞うご期待って感じか？」

作者「そうなりますね～」

多聞「それはそうとそろそろ次回予告だ、桃李」

桃李「けいおん！に似たセカイに到着した俺たちは、ある出来事をきっかけに平沢姉妹と出会う。

しかし、奏者の素質を持つ唯を狙い俺を殺した相手フォルネウスが唯に襲いかかる！

次回　第2楽章　『奏でる鬼』でまた会おう！」

作者「感想・ご意見お待ちしております」

第2楽章　『奏でる鬼』（前書き）

という事でルカにより代行者になった桃李。ギターの多聞を一緒にけいおん！に似たセカイに
向かったのだが……とりあえず続きをどうぞ～

第2楽章　『奏でる鬼』

桃李たちが、ゲートから出てきた場所は、誰もいない公園だった。

桃李
「着いたのか？」

多聞
「（そのようだ）」

桃李
「うわ！　頭の中から声が聞こえる」

多聞
「（念話だ。とりあえず、頭の中で念じてみろ）」

桃李
「（わかった。聞こえる～多聞？）」

多聞
「（あぁ、ばっちりだ。それにしてもここは公園のようだが）」

桃李
「（そうらしいな、誰もいなくて助かったぜ）」

多聞
「（なぜだ？）」

桃李

「（考えても見ろ、ギターと普通に話す高校生、どう見てもおかしいだろ）」

多聞
「（たしかに……それはそうとこれからどうする？）」

桃李
「（さて、どうするか～）」

桃李たちがこれからどうするか考えていると

？？
「キャアァァァァァ――――！！　ひったくりよ～！」

女の子の声がする。

桃李
「ん？　ひったくりだって？」

桃李達は公園を出るとちょうどひったくり犯と遭遇する。

ひったくり犯
「どけ！」

そう言うとひったくり犯は、ナイフと取り出し、桃李に向けるが、

桃李
「ハン！　そんな脅しが効くかよ！」

そう言って、ひったくり犯がナイフを持っている手を蹴り上げて、

ナイフがすっぽ抜けた瞬間、

ひったくり犯の懐に入り、そして一本背負いをした。

ダン！

ひったくり犯はコンクリートの地面に叩きつけられ、受身が取れず気を失った。

こうして、ひったくり犯を退治した桃李は、その後、ひったくりをされた女の子が呼んだ警察が

駆けつけ、ひったくり犯は御用となった。

女の子
「どうもありがとうございました」

女の子の容姿は、茶色い髪を上でポニーテールにした中学生くらいの女の子だった。

桃李
「いやいや、気にしないでくれ」

女の子
「いえ、本当に助かりました。この財布がないと今月食費とかがやばかったので」

桃李
「それはよかった。うんじゃな～」

桃李は女の子に背を向け手を振って去ろうとしたところ、

女の子
「ま、待ってください！　あのお礼をしたいんですけど」

桃李
「んー、別にいいよ、それじゃ！」

女の子
「あ……」

桃李は女の子にそう断るとそこから離れていった。

女の子は後ろ姿の桃李を見送りながら、

女の子
「カッコイイ人だったな……」

と呟くのだった。

そのとき、女の子の携帯が鳴る。

Ｐｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉ……

Ｐｉ！

女の子
「あ、お姉ちゃん、どうしたの？」

？

「憂、助けて〜!!　変な人が!　きゃあぁぁぁぁぁ――――!!
　ｐｕｌ　ｐｕｌ」

女の子
「お、お姉ちゃん!!」

――――――ｓｉｄｅ　？

今日は、リッちゃん達は用事があるとかで珍しく一人で帰ることになった。

帰り道の途中、変な人に声をかけられた。

その人は白いハットに丸型のサングラスをかけたちょっと不気味な男の人だった。

男
「貴様――――『奏者』か。しかもまだ目覚めてない。
　これは好都合だ」

？
「何……おじさんは誰？」

私は顔を強ばらせてそう言うと男の人はこう答えた。

男
「これから死ぬお前にはどうでもいいことだ」

そう言うと男の人の左手が気持ち悪いまるでタコの足のようなものに変わった。

？

「ヒィ！」

私は、そこから逃げた。

男の人は、まるで狩りを楽しみ様な感じでゆっくりと一歩一歩迫ってくる。

私は全速力で走ると近くの廃工場に身を潜めた。

？

「（ここなら……見つからないはず）」

私は廃工場の中に入り2階へと進み、置いてあったドラム缶の裏に隠れる。

そして妹の憂に携帯で助けを呼んだ。

？

「憂、助けて～！！　変な人が！」

私は必死に電話で助けを求めると

男

「見つけた～」

私は声を向いた方を振り返ると先ほどの気持ち悪い触手の先端に目が付いていて

私を見ていた。

？

「きゃあぁぁぁぁぁ――――――！！」

そう叫んだ瞬間私は携帯を落としてしまい通話が切れてしまった。

私はまた全力でそこから逃げると2階の奥のほうの部屋の隅へと追い詰められてしまった。

男

「もう、鬼ごっこは終わりだ……死ぬがいい！」

？

「きゃあぁぁぁぁ――――――！！」

私はもうダメだと思い目を瞑った。しかし、一向に男からの攻撃がこない。

私は恐る恐る目を開けると目の前に私と同じ高校生くらいの男の子が、男の人と私の間に立っていた。

男

「なぜ、生きている！」

桃李

「ある人が生き返させてくれたのさ！　もう大丈夫だ、ここは俺に任せろ！」

その日、私は鬼《代行者》と出会った。

――――――side　out

桃李
「もう大丈夫だ、ここは俺に任せろ！」

？
「え？　え？」

女の子は困惑していた。

いきなり現れたこの男の子は誰なのか。

そしてあの私を殺そうとした男の人の正体は？

意味のわからない状況に女の子がとりあえず、取った行動は、

なぜか自己紹介だった。

？
「私、唯、平沢　唯！　貴方は？」

桃李
「俺は山彦　桃李。よろしくな」

唯
「よろしく～」

男
「私を無視して、何自己紹介してるんだ！」

男がキレた。

桃李
「とりあえず、話はあとだ。このまま後ろにいてくれ。いいな唯」

唯
「うん！」

桃李
「待たせたな。フォルネウス」

フォルネウス
「ほう……我の名前をどこで知った？」

桃李
「どこでもいいだろう。それより、この前の借り返させてもらうぜ！」

フォルネウス
「雑魚が……奏者の力に目覚めていないお前なんぞに誰が負けるか」

桃李
「ハッ！　これが俺が死んで手に入れた力だ！」

そういうと制服のポケットから変身音叉・音角を取り出し、近くを音角で叩き、音を出す。

ピィン！　キィィィィィィィィィィン……！

そして額に音叉を当てると桃李を大量の岩に覆われ、それらを払うように腕を振るい、

桃李
「はあぁぁぁぁぁ――――――はぁ！」

それがかき消され、中から現れたのはなんと鬼だった。

鬼の容姿は、仮面ライダー響鬼の響鬼顔に轟鬼の体でマスクの縁取り・腕の色が緑になっていて

体は黒色。いきなり鬼に変身した桃李を見たフォルネウスは、

フォルネウス
「その姿は！？」

桃李
「俺の名はそう――――仮面ライダー奏鬼（そうき）だ！」

フォルネウス
「か、仮面ライダー奏鬼だと！」

桃李
「多聞、戦闘形態に変化！」

多聞
「心得た！」

ギターの多聞がそう言うと音撃弦モードに変化する。

※イメージとしては、轟鬼の音撃弦と音撃震が一体化した感じ。先端は三又じゃなく四又。

フォルネウス
「こしゃくな！　雑魚の分際で！」

そう言うと全身を変化させ、頭部がアンコウ、両腕はタコの足のような左右４本計８本にわかれた触手に
体は人間のような姿に変化した。

桃李
「行くぜ！　うりゃぁ！！」

そういうと、多聞のネックを両手で持ち、斧のようにフォルネウスを攻撃した。

フォルネウス
「甘いわ！！」

フォルネウスはその攻撃を避け、全部の触手を伸ばし、桃李の動きを封じる。

桃李
「ぐぐ……！！」

フォルネウス
「動けまい！　今度こそ引導を渡してくれるわ！」

そういうと口から先のとがった鋭利な刃物のような長い舌を出し、

桃李の心臓を突きさそうとしてその長い舌を伸ばした。

桃李
「ぐぐぐ……ま…けるかぁぁぁ！！」

桃李はそう叫ぶと力任せに自分を拘束している触手を引きちぎり、
フォルネウスの舌を
掴んだ。

フォルネウス
「な、なんだと！」

桃李
「残念だったな。今の俺はか～な～り強い！」

フォルネウス
「くっ…」

フォルネウスは悔しそうにしていると桃李は追い打ちをかけ、持っていた舌を引っこ抜いた。

フォルネウス
「ぎゃぁぁぁぁ！！」

フォルネウスの口からは大量の緑色の血が噴き出す。

唯
「きゃあぁぁぁぁ！！」

その光景に唯が叫ぶ。

桃李
「唯、目を瞑って耳を塞いでろ。すぐ終わらす」

桃李は優しくそういうと

唯
「わかった！」

そう言って、唯は桃李の言う事を聞き、目を閉じ耳を塞いだ。

桃李
「じゃ、トドメだ」

そういうと桃李は素早く間合いを詰め、多聞をフォルネウスの腹部に突き刺した。

フォルネウス
「ぐぎゃぁぁぁ！！」

桃李
「……音撃斬・森羅万象！！」

フォルネウスを突き刺した状態で多聞を爪で弾き、突き刺した部分から直接清めの旋律を

フォルネウス体内に送り込んだ。

フォルネウス
「ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！！！」

そしてフォルネウス内部に送られた清めの旋律の力によりフォルネウスは木端微塵となった。

ドォォォォォォン！！

こうしてフォルネウスは倒されたのだった。

フォルネウスを倒した桃李は辺りを警戒し、敵が他にいない事を確認すると変身を解いた。

桃李は、目と耳を塞いでいる唯の肩を叩き、

桃李
「もういいぞ」

唯
「さっきの怪人は？」

桃李
「俺がやっつけた」

唯
「おお～！　桃李君って凄いね」
桃李
「そうでもないさ、初めての戦闘だったから疲れちまった」
そういうとその場にへたり込み、元気なく笑った。
唯
「それにしてもあの姿なんなの？　それに私なんで狙われたの？」
桃李
「んーとりあえず、ここからでないか？　少し話長くなるし」
唯
「じゃ、家においでよ。お父さんとお母さんいないし」
桃李
「ん？　一人暮らしなのか？」
唯
「違うよ。妹と一緒に暮らしてるよ。妹の名前は憂っていうの」
唯が笑顔でそう言うと
桃李
「うんじゃ、とりあえず、おじゃまするかな」
唯

「でも、その前に携帯さっき落としちゃった」

桃李
「じゃ、探すか？」

唯
「うん！」

こうして、二人は唯の携帯を探す事になったがすぐに見つかり、

唯の家へと向かうのだった。

そんな二人を遠くから見ている女が一人。

女
「まさかフォルネウスがやられるとは……これはベルフェ様に報告せねば」

そう呟いて女は闇に紛れて消えたのだった。

唯の家に着いた俺は、

桃李
「あ」

憂
「あ…！」

さっき助けた女の子と再会するのだった。

＞

＜続く

第2楽章　『奏でる鬼』（後書き）

作者「という事で、平沢姉妹と出会い、宿敵フォルネウスもあっさり倒した桃李君。
次回が楽しみですね～。という事で次回予告。
次回は、軽音部の面々と出会い、そして意外な人達とも知り合いになります。
ということで、第3話　『軽音部と隣人部』でお会いしましょう」

「感想・お便りお待ちしてます」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7192z/

A.O.G -Agent　Of　God- ～旋律を奏でし鬼～

2012年1月14日21時56分発行